

序 夜の森

つんのめるように駆ける、駆ける。

裸足の指がつかむ土の感触が変わった。小平良山を登り切るまで、あと少しだ。

蓑吉は足を緩めた。走るのをやめると身体じゅうの力も抜けてしまい、よろめいて地面に倒れ込んだ。ようよう腕をついて頭を上げ、胸をあえがせて息をつく。

夜の森に、聞こえるのは己の激しい呼吸ばかりだ。蓑吉のほかには誰もいない。

——先に行け！ 小平良様を登ったら、滝沢へ下りろ！

蓑吉を番小屋から追い立てるとき、じっちゃんが大声でそう叫んだ。滝沢の方へ半里も下りれば、山道の途中に仁谷村の馬留がある。村の暮らしては月に何度となく通る場所で、蓑吉も身体で覚えているはずだけれど、この夜の底では勝手が違った。

今日は昼からずっと薄曇りで、夜になっても雲が月と星を隠している。それでも提灯ひとつなしで何とかここまで走ってこられたのは、痩せた雲の上に昇っているはずの月の光が、雲を突き抜けてわずかに届いているおかげだ。四方の山々の頂が綿帽子のように雪をかぶり、かすかな雪明かりを放つ

ているが、その弱々しい光では、空と山、夜と森、小道と藪を分けるのが精いっぱい、方角までは教えてくれない。

本当にこっちで合っているだろうか。

震える手で地面を撫でてみる。ざらざらした感触は、小平良山のふうわりとした土のそれとは明らかに違う。大平良山の土だ。それでようやく、もうひと息つくことができた。強く握りしめると、尖った砂利の粒が掌に痛い。たった十一の蓑吉の掌はまだ柔らかい。足の裏だって同じだ。蓑吉は赤裸足である。馬留にたどり着けば草鞋があるだろうが、そこまでは少し辛くなる。

大平良山の上から、風が唸りながら吹き下ろしてきた。弥生三月の十日。このあたりの高さでは、山でも雪が溶け、春の兆しがそこに芽生えている。しかし、山頂から下りてくる風はまだ冷たく、へたりこんだ蓑吉の頬を打ち、冷汗に濡れた身体をおびやかす。

じっちゃ、何で追いついて来ん。

仁谷村は、肩越しに見おろす先に溜まる闇の向こうにある。灯も火も見えず、耳に突き刺さるようだった村人たちの悲鳴も聞こえてはこない。もう済んだのか。それとも、ただこちらが風上だから、何も聞き取れないだけなのか。

——ええか、小平良様を越えたら滝沢へ下るんじゃ。ずっと風上にいたらいかん。

——じっちゃは？

——わっしもすぐ行く。本庄村に知らせにゃならん。馬留で待っとれ！

じっちゃは叱りつけるようにそう言い置いて、自分は鉄砲を手に村長の家の方へと駆けていった。

じっちゃが向かって行く先では、村の男たちの怒声と、女たちの泣き騒ぐ声が入り乱れていた。不気味な地響きと、物の壊れる派手な音もした。家具や道具の類いだけではなく、小屋の屋根が崩れ柱が倒れるような重たい物音だった。

あれはいったい、何だったのか。

蓑吉はじっちゃと二人暮らした。山作りに携わらず、若いころから一途に鉄砲撃ちで暮らしてきたじっちゃの腕前は村いちばんで、村長にも頼りにされている。ずっと二人で番小屋に住んでいるのも、そこが村の守りの要になる見張り場所だからだ。

その一方でじっちゃは、うっかり鉄砲を子供に見せることさえ厭うていた。村のなかで持ち歩くときには筥で包んで荒縄を巻く。こんなもんは、どうしてもこれを使わねばならん者だけが触ればいいと、蓑吉からも遠ざけていた。おまえは鉄砲撃ちになっちゃならん。山作りになれ。蓑吉はそう言い聞かされて育ってきた。

そのじっちゃが、剥き出しの鉄砲を抱えて村のなかへ走っていった。腰につけた小さな壺のなかの火種が、赤い点になってじっちゃと一緒に飛んでいった。

たかだか四半刻くらい前のことだ。ぐっすり眠っていたところを起こされたから、蓑吉はまだ寝ぼけていた。起きろ、起きて走って逃げろ。仁谷村では番小屋と村長の家だけに許されている常夜灯の淡い光に、じっちゃの白い顔が見えて、怒った声がそう急ぎ立てた。その声にかぶって、戸外からは村人たちが叫ぶ声が切れ切れに聞こえてきた。

夜の闇のなか、深く寝静まっていた村。何かが入り込んできて、村人たちを襲っている。子供の蓑吉にも、それはわかった。熊はまだ早い。山犬の群れか。あいつらが早く村に近づく年は凶作になる。

——今年は風の巡りがおかしいな。
昨日か一昨日だったか、雲の切れ目からのぞくお天道様を仰いで、じっちゃんがそう呟いたのを、蓑吉は覚えていた。

——沢沿いに吹き登る風が、雲を大平良様へ押し上げとうで。わしもこんなのは知らん。
風がおかしいから、今年は山犬の動きも違っていいのか。

——じっちゃん、山犬か？

寝ぼけ眼で問い返した蓑吉に、鉄砲の弾を数えて小さな革袋に詰めながら、じっちゃんは振り返りもせずに答えた。

——あれは違う。

そんなら人狩りか。さらに聞きたいところを、蓑吉はぐっと堪えた。問うのが怖いという気持ちもあった。口に出したら本当になってしまいそうだとも思った。

じっちゃん、どうしたんだ。

夜の森で一人、何とか腰をあげて立ち上がり、しかし蓑吉は動けない。息ばかりが荒く、膝が震える。じっちゃん、早く来い。早く追いついて来てくれ。おいら、独りじゃ怖い。

そのとき、暗い森の向こう、仁谷村があるはずの方角で火の手があがった。蓑吉の目には、夜の底で地獄の釜の蓋が少しだけ開き、炎の舌がちろりと覗いたかのように見えた。

やっぱり人狩りだ。村に火をかけて、みんなを追い立ててるんだ。

戻ろう。一人で逃げることはできない。じっちゃんを助けなくては。足を踏み出したとき、背後の藪が動いて人の声があった。

「蓑吉、そこにいるのは蓑吉かあ？」

泳ぐように藪をかき分けて頭を出したのは、伍助だった。ふやけた声で、すぐわかる。

「伍助さん、そんなところで何してんだ」

何っておまえと、伍助は藪から這い出てきた。

「あんなもんを見たら逃げるしかねえわ。源じいはいっしょにおらんのか」

名を源一、村人たちには源じいと呼ばれているのが蓑吉のじっちゃんだ。

「じっちゃんは村にいる」

「ああ、それじゃもういかん」

這いつくばったまま、伍助はぐらぐらと首を振った。

「いかんって、何だよ。じっちゃんは鉄砲撃ちだあ。山犬なんかに負けるもんかい」

「あれが山犬であるもんかあ」

ふるい起こした蓑吉の勇気が、その情けない震え声にたちまちくじけた。

あんなもん。伍助はそう言った。あんなもんを見たら。

伍助は村の持て余し者だ。山作りも畑仕事もせず、女房に働かせて酒ばかり呑んでいる。仁谷村のような山里に、こんな男に呑ませる酒などない。だから伍助は山に入り、木の実や草の根を採ってきでは醸して、自前の酒を調達している。そこだけは妙に器用なのだが、見よう見まねの猿酒まがいのしろものだから、呑めばただ酔っ払うだけでなく、伍助はいつも正体不明にとろんと呆けている。

そんな男の言うことだ。普段なら蓑吉だって聞き捨てにするのだが——。

「じゃ、いったい何なんだよ」

伍助の表情までは見て取れない。瘦せたしゃくれ顎の形がわかるばかりだ。

「誰か、火いかけやがったかあ」

その場に座り、村に向かって拝むように両手を合わせると、なまんだぶなまんだぶと、腑抜けた声で唱え始めた。

蓑吉も、目を凝らすまでもなかった。地獄の釜の蓋がさらに開いて、火が燃え広がってゆく。

「わっしや、厠で寝とったんじや。おかげで命を拾ったがあ」

自分でもまだそれが信じられぬというように、伍助は譚言めいた呟きを漏らした。

「村の衆はもうみんないかん」

いっそう激しく両手を擦り合わせる。震えながら泣きながら、なまんだぶなまんだぶと繰り返す。

蓑吉はぞくりと震えた。「伍助さん、あれは人狩りかあ？」

手を合わせ目を閉じたまま、伍助はかぶりを振った。「弾正めの牛頭馬頭どもは、人は狩っても村は焼かねえ」

隣藩、永津野藩の御側番方衆筆頭・曾谷弾正が手足のようを使う役人たちを地獄の獄卒になぞらえ、

香山の民はそう呼んでいる。

ここらは山国で、海はない。〈板子一枚下は地獄〉という水夫の言い回しは知らないが、森ひとつ、尾根ひとつが地獄と極楽の分かれ目だ。あっちの永津野が地獄、こっちの香山が極楽。瓜生のお殿様がいらっしやる限り、香山は極楽だ。

「蓑吉、もう行こう」

涙と洩水を垂らしっぱなしに、伍助はよれよれと起き上がった。

「おまえが逃げねえと、源じいも浮かばれねえぞ」

「おかしなこと言うな！」

「し、したって」

子供の蓑吉にさえ気圧される伍助は、てんで意気地無しだ。

「そんなら、わっしや一人で行く。お庄屋様に知らせんと」

小平良山を北へ登り切り、東に下れば永津野領内へ達し、西へ下れば香山の領内で、仁谷村の馬留を過ぎ滝沢を経て二里ばかり行ったところにあるのが、このあたりの五カ村を束ねる庄屋の住まう本庄村だ。

じっちゃんもそう言った。本庄村に知らせにやららん。けど、伍助みたいな呆け者が言うことに、お庄屋様を取り合ってくださいさるだろうか。仁谷村で何が起きているのか、伍助はちゃんと伝えるのだろうか。

「伍助さん、ホントにあれば何なんだ。知ってんなら教えてくれろ」

凍える身を自分の瘦せた腕で抱きながら、伍助は首を縮めて、さらに燃え広がってゆく火の色を遠く見遣っている。

「ありや——お山じや」

お山ががんずいとする。

「おまえ、源じいから聞いてねえのか。わっしや、おまえより小さいころ、じいさまに教わったぞ。

お山にゃあ、古うい話も、おっかねえ話も、たんとあるがあ。古沢の子取り銀杏やらあ、妙高寺の鳴らずの鐘やらあ」

「伍助さんとは、じいさまもとっちゃも酔っ払いじゃねえか」
何を教わったって信じられるもんか。蓑吉が思わず毒づく、伍助はさらに小さくなり、自分の胸元にぼそぼそ呟く。

「したって作り話じゃねえ。わっしのじいさまは言っとったぞ。お山ががんずいたら、もうどうしようもねえんだあ。お鎮まりになるまで隠れてるしかねえ」
不意に、その呟きが恨み言のようになった。

「山作りなんぞしよるからじゃ！」

吐き捨てて、伍助は蓑吉に背を向け、とぼとぼと歩き出した。右足は裸足で、左足に脱げかけた草鞋が引っかけかかっている。普段は走ることなどないので、どこか痛めたのだろう。裸足の右足を引かずっている。

蓑吉は強いて、その惨めだったらしい背中から目を引きはがした。村へ戻ろう。火に追われてこっちに逃げてくる人たちと行き会うかもしれない。

また一陣の風が吹きつけてきて、蓑吉の半身を叩いた。

今度の風は冷たくなかった。大平良山のとっぺんからの吹き下ろしでもない。もっと近い。小道を挟む藪の片側が不穏にざわつく。

生臭い。

おかしい。この臭いは何だ？

蓑吉は動けなくなつた。足が一步も前に出ない。首を巡らせることさえできない。

藪はまだざわめいている。ただ揺れ騒いでいるだけではない。その揺れが移ってゆく。小道に沿っ

て、闇のなかを。

夜風が低く唸る。唸りながら動いてゆく。

いいや、ただの夜風じゃない。

目玉だけ動かして、蓑吉はその動きを追いかける。

背後で、ひゅつと息を吸い込むような音がたつた。ほんの一瞬のことだった。

「伍助さん？」

夜の底で赤々と燃えあがる火の色は遠く、蓑吉を包み込む闇はいっそう濃い。

伍助の返事が聞こえない。

思い切って、蓑吉は振り返った。

伍助の姿は消えていた。もう行ってしまったのか。あの足取りで、たちまち姿が消えるほど遠くに？

にわかに心細さに襲われて、蓑吉は跳ねるように身を動かし、さっきまで伍助がいたところに駆けつけた。

脱げた草鞋が落ちていた。

その草鞋に点々と、黒く濡れたものがついていた。血だ。

藪が騒ぎ、闇がうごめく。

——ありや、お山じゃ。

蓑吉は、取り返しがつかないほどはつきりと、彼を押し包む闇が迫ってくるのを感じた。